

2021/06/20

ヨハネの福音書 講解メッセージ ⑤⑤

『孤独の栄光』 ヨハネ 18:1-14

「イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケデロンの川筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこに入られた。」(ヨハネ 18:1)

最後の晩餐での話が終わり、イエス様は弟子たちを連れて、園に出かけました。この園はゲッセマネと呼ばれ、ルカの福音書では次のように記されています。

「それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。」(ルカ 22:39-40)

私たちが祈りを必要とする理由は誘惑に陥らないようにするためであることがわかります。誘惑とは何でしょうか。それは、中心であるイエス・キリストからそれてしまうことです。イエス様は、「私にとどまりなさい」「主の愛にとどまりなさい」と、何度も教えておられます。これが私たちの中心です。この中心からそれることがないように祈ることが必要なのです。

イエス様の愛とは、あなたを肯定する愛です。イエス様は、あなたがどのような者であっても、良きものとして受け入れておられます。この愛にとどまるのが、中心にとどまるということです。つまり、誘惑とは自分をダメなものだと否定することです。神が肯定するものを否定することが誘惑なのです。人の価値をうわべで判断して否定することのないよう、祈りを通してイエス様を見上げるようにとイエス様は言われたのです。

「そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。」(ルカ 22:41)

イエス様は、弟子たちから数メートルばかり離れたところで祈られました。静寂の中で、イエス様の祈る声ははっきりと聞こえる場所です。イエス様は、祈りを弟子たちに聞かせたかったのです。なぜなら、孤独になって祈るところに、神の栄光が現れるからです。

人は孤独を嫌いますが、本来人は孤独なものです。神様はあなたを、他の誰でもないたった一人の人間として造ったからです。ところが、人は孤独に耐えられず、人と交わって孤独を避けようとします。その結果、人と交われば交わるほど、自分を捨ててしまうという現象が起こります。

物質が、溶け合うことによって本来の性質を失うように、人と交わることで、私たちは自分を見失い、自由を見失ってしまいます。それでも、人は孤独に耐えられず、人と交わることを選びます。しかし、どんなに自分を捨てて人と交わったところで、私たちは孤独です。どれほど自由を犠牲にしても思うような交わりはできず、虚しさを覚えます。人はそうした中に生きているのです。

私たちが抱えている孤独の一つは、罪の孤独です。人に言えない罪や秘密を抱えていると、人と密接な関係を築くことができず孤独になります。また、死の孤独もあります。人は、死を予感したとき、孤独を覚えるものです。死ぬときは誰もがひとりです。人は一人で生まれてきて一人で死ぬ、孤独な存在です。この孤独から誰も逃げることはできません。それでも人は、その現実を忘れるため、孤独を避けようとして生きているのです。

イエス様の弟子たちもそのような生き方をしていました。そこでイエス様はあえて孤独を選択し、孤独の中に神の栄光があることを見せるために、弟子たちに祈りを聞かせられたのです。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」(ルカ 22:42)

孤独から逃げないということは、自分の中にある否定的な思いと向き合うことです。私たちは皆誰もが罪を抱え、心の中には否定的な思いが渦巻いています。イエス様は神ですが、私たちと同じ死の体をもってこの地上に來られました。死は私たちの命を否定します。イエス様もこの地上では、否定という波の中でいつも戦っていたことになります。

孤独とは、否定的な思いと向き合い、それと戦うことです。そして、本当に否定的な思いと向き合うと、やみの中で光が見えるように、私たちは自分の中心に神がおられることが見えてくるようになります。孤独はやみかもしれませんが、やみを避けると、光を見ることはできません。本気で孤独になり、自分と正直に向き合うなら、それでもあなたを愛しているという神が見えてくるのです。

「すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。」(ルカ 22:43)

イエス様が孤独と向き合って祈っていると、御使いが現れてイエス様を励ましているのを、弟子たちは見ました。孤独と向き合って祈る時、このように神を見ることができると、イエス様は伝えようとなさったのです。あなたが神の前に泣き崩れて祈る時、言葉では表現しようのない神の愛を感じ、平安が来る体験をすることができます。否定的な思いに陥り、どんどん否定的な思いになって自分の罪深さを知り、孤独感を味わう時、その孤独の中で、それでも神はあなたを愛しているという光を見ることができるとのことです。これこそ、神の栄光です。

つまり、孤独とは栄光であって、逃げたり回避したりする必要はありません。むしろ、孤独の中に身を沈め、神と向き合って、本当の意味の自由を得てほしいとイエス様は望まれました。孤独を避けるために人と交われば交わるほど、あなた自身は失われていきます。しか

し、孤独を選択し、孤独と向き合うなら、ますます神が見えるようになり、私たちは自由になります。そして、自由になったら、本当の意味で人と交わりができるようになるのです。イエス様はそのことを弟子たちに示したかったのです。

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。それで、彼らに言われた。「なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい。」（ルカ 22:44-46）

弟子たちは、イエス様が大変なことになっていると思っていましたが、実はそうではなく、イエス様は父なる神と一つ思いとなって、しっかりと否定に向き合い、立ち上がっていました。そしてイエス様は、悲しみの果てに眠り込んでいた弟子たちに向かって、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」つまり、「間違った方向に行かないように、しっかりと孤独と向き合って祈っていなさい。」と語られたのです。

人は皆孤独です。しかし、実際には、孤独ではなく、神が共におられるのです。人に死が入り込んだことによる一番の問題は、神が見えなくなったことです。人間は、死によって有限性になったため、永遠性の神が見えなくなりました。しかし、神は共におられます。私たちは、神の土台の上に建てられており、神がいつも共におられるのです。真の孤独の中でそれを知ることができます。体を通し、五感を通して、顕在意識で神を知ろうとしても神はわかりません。しかし、孤独になって祈る時、五感を無視した霊的な体験をするのです。その結果、「私はひとりではなく、神が共にいてくださったのだ」と気づくのです。それが、「インマヌエル——私は共にいる。」というイエス様が繰り返し語られたメッセージです。

「ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。」（ヨハネ 18:2-3）

多くの人は、キリストを裏切るなんて、ユダはとんでもない悪党だと思うでしょう。しかし、孤独という面から見れば、ユダはただ孤独を回避しようとしたに過ぎません。彼は、孤独に耐えられず、当時の支配者たちとつるみしました。私たちも同じようなものです。どうせつるむなら、力のある人とつるみたいと人は考えます。しかし、人と交わることによって、私たちは自分の本来の性質を失います。そして、自分を失えば失うほど、私たちは孤独を感じるという悪循環を生み出します。

孤独のつらさと悪循環から抜け出すには、神が共におられるから孤独ではないと気づくことです。そうすれば、まことの自由を手にして、初めて人と本当の交わりができるようになります。このユダの姿は、自分自身の弱さだと読み取ることができれば幸いです。

「それはわたしです。」イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。彼らは、「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。」(ヨハネ 18:4-5)

イエス様はすべてのことを知っておられたわけですから、この患難を避けることもできました。しかし、すべてのことを知っているがゆえに、あえて避けることをしませんでした。つまり、神は患難を避けません。なぜなら、患難の先に栄光があることがわかっているからです。

この後の出来事になりますが、イエス様が捕らえられた後、ペテロは、「あなたもイエス様の仲間だ」と言われ、「そんな人は知らない」と答えました。これとは対照的に、イエス様は、「ナザレ人イエスを探している」と言われ、「それは私です」と答えました。ペテロは、孤独を避けるために人とつるむ道を選びましたが、イエス様は一人でないことを知っておられたため孤独を避けなかったのです。

「イエスが彼らに、「それはわたしです」と言われたとき、彼らはあつさりし、そして地に倒れた。そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とイエスが言われたことばが実現するためであった。」

(ヨハネ 18:6-9)

なぜイエス様が「それはわたしです」と答えたとき、ユダヤ人たちは地に倒れたのでしょうか。イエス様が答えた「それはわたしです」とは、ギリシャ語の「エゴ・エイミ(わたしはある)」です。これは、旧約聖書で神がモーセに語られた神ご自身を指す言葉です。つまり、イエス様は「私が神だ」とお答えになったのです。

モーセが神様から頂いた十戒の中に、神の御名をむやみに唱えてはならないという厳しい戒めがあります。そこで人々は、神の名を決して口にすることはなく、「YHWH」と神聖四文字と呼ばれるもので記しましたが、これには母音がないので、どう発音すればよいのかわかりません。おそらく「ヤーウェ」と読むのではないかと考える人たちもいますが、神が呼ぶべきではないと言われているのですから、読みを採るのは愚かなことです。しかし、このままでは読みにくいので、彼らはこれをほかの言葉に置き換えて読むことにしました。「アドナイ(主)」という言葉です。そして、イエス様の時代に使われていた70人訳聖書は、そのことばを「エゴ・エイミ」と訳しました。つまり、彼らが「ナザレのイエスを」と求めたのに対して、イエス様が「私です」と答えたその言葉は、「私が神だ」と答えたことになります。そのため、それを聞いた人々は倒れ、兵隊たちは、もしかして自分は神をとらえようとしているのかと思って、しり込みしてしまうのです。さらに、イエス様をご自分を神と呼んだた

めに、当時のユダヤ人たちはイエス様を殺そうとしたのです。

ここまでイエス様は、ご自分を「神の子」あるいは「神から遣わされたもの」というように、少しオブラートに包んだ言い方をしていました。しかし、十字架に架かる直前、最後の最後に、「私は神だ」と3度言い、三位一体の神をお示しになりました。

「シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」そこで、一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人から送られた役人たちは、イエスを捕らえて縛り、まずアンナスのところ带到了。彼がその年の大祭司カヤパのしゅうとだったからである。カヤパは、ひとりの人が民に代わって死ぬことが得策である、とユダヤ人に助言した人である。」(ヨハネ 18:10-14)

アンナスはもと大祭司で、当時の大祭司カヤパは、彼の娘婿に当たります。歴史書には、アンナスとカヤパが大祭司を務めていた時期が明確に記録されています。つまり、聖書の記述は歴史的に正しいことがはっきりとわかるのです。もっとも古いマルコの福音書は、イエス様と同時代に生きた人々のために書かれました。誰もが知っている歴史的人物の名まで記された書物の内容が間違っただけであつたなら、そのような書物の信ぴょう性はまったく失われてしまいます。当時、聖書が手書きで広まっていた背景には、皆が知っている人たちが登場し、うそ偽りが無いことが明らかだからです。聖書は、神を信じる人にとっては神の言葉ですが、そうでない人にとっても一級品の歴史書なのです。

有名人についての伝説は、その人が死んで、誰もその人を知る人がいなくなってから生まれるものです。そして、やがて神として祭られることが多いのです。しかし、イエス・キリストに関する書物は、イエス様を知っている人や十字架をその目で見たと人がまだ生きている時代に書かれ、それでもなお広まっていたのです。そこに人間が付け加えたつくり話が入る余地はありません。

聖書に記されているイエス・キリストの活動は事実であり、イエス様が語った言葉も事実です。真理の言葉を人生の糧として生きていきましょう。